長谷川潔全集

第三巻

長谷川伸全集　第三巻

旅新八景　続股旅新八景

られた石松　人斬り伊太郎　ほか

朝日新聞社

長谷川伸全集　第三巻
股旅新八景　ほか
全十六巻
一二〇〇円

昭和四十六年三月十五日発行
昭和四十七年十月五日第二刷
著者　長谷川伸
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　凸版印刷
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

装幀　原弘
帯挿画　岩田専太郎

© SHINYOKAI 1972

0393-240103-0042

長谷川伸全集　第三巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

股旅新八景　五

八丁浜太郎　七

頼まれ多九蔵　二九

旅の馬鹿安　五三

小枕の伝八　七四

八郎兵衛狐　九六

獄門お蝶　一一八

髯題目の政　一三九

三ツ角段平　一六三

続股旅新八景　一八五

旅鴉苫の蒲団　一八七

親分子分　二〇九
沢の勘八月の森　二四一
明月悪念仏　二五八
旅の討死塚　二七一
宗五郎死人捌き　二八四
長次追善勝負　三〇一
江戸の花和尚　三一五
殴られた石松　三三五
人斬り伊太郎　四二九
飛び吉道中　四六三
引返し百太郎　四七五
解説　村上元三　四九一

股旅新八景

昭和十年八月　『股旅新八景』（新小説社刊）より

八丁浜太郎

背中討ち

背後にヒヤリとしたものを感じた八丁の浜太郎は、永年の鍛練で、気がついたときはからだをかわすとき、かわしたときは腰の長脇差がものをいう時だった。いまもその例にもれず、二間幅の細い道に、轍が幾条も溝をつくっている両側は、真ッ黒土の麦畑。そこで、さッとかわした浜太郎の顔の色が少し青味がかり、穂ののびた麦の下にねじった踵のあとをつけた。

浜太郎の手で鞘走った無銘物の人斬り道具が、キラリと鳴るように光って、すわ、一瞬のうちに人を斬った。

「だあ！」

二十七、八の熊みたいなばくち打が、皮肉を裂かれ骨を削がれ、肩を竦めて両踵をあげた。

「出し抜けに背中討ちとはとんでもねえ」

と浜太郎の引導がわりの叱言のうちに、手からとり落した抜刀を追いかけるよう、俯向けに轍の上に、その男は、気力を失った顔をべったりおしつけて眼を瞑じた。

「こんなことをさせるのはどこのだれだ、おらあここらの者に怨みもつらみも買っちゃあいねえ」

という声の向けどころは、半分あの世へ行った足もとの熊男ではなかった。中空たかくさえずる雲雀の下で、足もとを青い麦葉にうずめたよう、突ッ立って腕を組み、額越しに睨む眼も恰好が、さながら豹のような四十がらみ、ここらでは飛ぶ鳥落す親分らしい、がッちりみごとな大男。

浜太郎は血ぶるいした刀に、ふところ紙を出してしごき取りに血を取った。

「そこのお人、うかがいますぜ」

敵意をふくめた慇懃さで、浜太郎がかけた言葉が真ッ四角だった。

「なんだ！」

親分風の男は組んだ腕を解いた。

「この、足もとにいるこの男、ただいま娑婆から旅立ったのは、ご覧のとおりの一埒で」

浜太郎は血を拭った刀を鞘に、納めの鍔音を高くたてた。

「いかにも。ふびんやちッと九蔵が脆すぎた」

「子分衆？　でございますか」

「子飼い同然だった、葬いは立派に出してやる」
「杯親子であってみればそのはずだ、そこで」
「待った旅人。名をきこう。おれは半塚の妙太郎、このあたり七里十里じゃあ、どこへ行っても些か響いている名の主だ」
「生れは武州、名は浜太郎、年は二十五、とだけで、仁義を切るのは略しますぜ」
「よかろう、確かに相違ねえてめえだった」
「何がね」
「沓田の兄貴の極楽院で、賭場に嵐をかけたろうが」
「ああ」
「ああとはいままで忘れていたという思い入れか。賭場荒しの私刑は重えと知ってるだろう。九蔵がかけた抜討を、とんでもねえとは言わせねえ」
「極楽院に違えねえ、やらずブッたくりのイカサマ勝負の地獄の盆莫蓙、ひッた切って荒してくれたに相違ねえ」
「その上、私刑ッ人をスパリとやった、堪忍ならねえッ」
「待った半塚の妙太さん」
「さんだと。さんづけに呼ばれるような貫禄不足じゃねえ」
「どうでもいいやな、そんなことは枝葉だろう。おいらが言おうというのは妙太さん」
「親分とつけやがれッ」
というを耳にもいれず、風に波立つ麦の穂をへだてにして、浜太郎は長脇差の鯉口をブツリと切った。
「正賽勝負は運を賭けるが、イカサマ賽は手品仕かけで底がある。欲と娯み両股かけた盆の上の勝負でも、卑怯は渡世で忌みものだ。おいらは吹けばとぶような旅渡りの三下奴だが、酔ッぺえ沢庵と間男と、イカサマ賽のお働きは大嫌えだ」
「そういうてめえが、下手なイカサマ賽をつかやがって、たったひと目で見破られたろうが」
「いかにもつかった、おまけに拙い」
「そうれみろ、他人のことがいえるか野郎ッ」
「拙いがかえって自慢にならあ、イカサマ上手は盗ッ人の高慢同様、見ても聞いても憎くならあな」
「野郎ッ口幅ッたいぞ」
「舌合戦はもうこのぐらいでいいだろう、あとは一盆、真剣白刃どりとおいでなさるか」
「なにをッ」
「それともまた、この盆は後日にお預けか」
「なに！」
「ただいまさあこいと刀尖をつき合わそう、とくれば、受け目はじゅうぶんおいらにある」
「……」
「妙太さんはたッた一人、おいらもやッぱり一人だが、同じ一人でも一人が違う」
「……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「どうなさいますね半塚の妙太さん」
にがりきって、顔に悩みと危惧が出ていた妙太郎は、なにを思いついたか眼にまず活気が立ってきた。
「男らしくやってこい。川ッぷちが勝負の場所だ」
と、太い指を一本出し、川の方角に向けて見せた。
「川ッぷちへか、考えたね妙太さん」
「時刻は暮れ六ツ、忘れるな、てめえも男だ」
「笑談だろう」
「なんだとッ、いやとぬかすか」
「ぬかしたらこの場で丁と斬ってくるか、半と斬り返してみせてやる」
「時刻は暮れ六ツ、場所は川ッぷち、腐れ舟が腹を出してるのが場所の目印だ、必ずこい」
「とッと待ってくれ。おいらはお目通り仕ったごとく、振分け荷物はさておいて、風除け合羽がわりの糸経一枚もたねえ旅人だ、風に吹かれてとぶ脛が一刻経てば五里さきだ。仰せどおりに待合わせては、脛の毛の何百本があくびと背イのびをして仕様がねえ」
「そいつあ卑怯だ、てめえ自分でいまいったぞ、卑怯は渡世の忌みものだと」
「そうわかっていたらたッたいま勝負とこい、大の男が双方一人、イカサマなしの正賽勝負だ、運が強けりゃ強いが勝ちだ」
「……」
「黙っているのはこの場の勝負、いやなのか」
「……」
「返辞がねえからそうきめるぜ」
「……」
「じゃあ、これまで、さようなら」
ず、ずッとうしろ下りに退いて、七歩のところで踵を返し、妙太郎に背中を向けたぎりで、浜太郎は、八ツさがりの日の下を、麦に波打つ野良の風に、鬢を吹かせて去って行った。
（野郎――憎い振舞いだ。あんな奴はおれの持ち場から出るときは、ちんばか片手か眼ッかちにしなくちゃあ、腹の虫がおさまらねえ）
空中の雲雀はさっきそれて、どこかの雲間に消え入っていた。

汗だらけの馬

毛深くってからだじゅうが髭かとみえる馬もあれば、腹なりが恐しく太鼓型で肢が太い痩せ馬もありで、不揃いながら鹿毛、青、栗毛で、六頭、六人ともに乗り鞍はなく、蓙一枚引ッかけたのはただ青が一頭だけ、あとは裸馬に手綱は農家お手製のねばりだった。
「急げッ、急げッ」

と青の背で、鞭代りの木の枝を振っているのは、真ッ赤な顔に汗が光っている半塚の妙太郎、あとの五騎はみるみる先を切り、中でも伯楽の伜に生れた町蔵と行者くずれの雁九郎は、親分はもとより草角力くずれの飛び石、雲助あがりの石州、前身不明の舟松をはるかに抜き、旋き立つ土煙を残し、残し、たちまちのうちに見えなくなった。

「親分、町蔵あにいと雁行者が、ハナを切ってすッとんで行った、ご覧でございますか」

からだが大きいことよりも、乗り下手には馬の迷惑ひとおりでなく、追い追い置き去りをくわされた飛び石が、一番遅れていた妙太郎と同列になった。

土煙りに眉毛を白くした妙太郎は、歯の根にたまった小砂を吐き吐き、馬を躍らせている心算で、小枝の鞭を尻にあてているが、打っているのは宙ばかりだった。

「急げッお角力！」

「合ッ点だッ」

どうやらこうやら飛び石は、妙太郎の馬の尻に馬を駆けさせた。この二騎より先に二騎、それより先の二騎は御法の心得が相当あるだけ、農家から無断で引ッぱり出すきわに、やはりいいのを選んで乗っていた、それだけにずッと快速だった。

「しめしめ、あいつだッ行者」

と町蔵が歯を剝いた猿みたいにいった。

「親分たちが着くころにゃ、おしまいにしておいて、あッと、なあ町蔵、あッといわせてみよう」

しめしあわせて、駆けさせる、二頭の馬は汗みどろだった。

「おッあぶない」

避けるとて転んだ老婆や女子供に、一瞥だにくれればこそ、踏み殺しかねる形相で、町蔵も雁行者も、馬を邪慳に叩きたてた。

「どう。どうどう、畜生どうだッ」

口かどに白泡を食んでいる二頭の馬から、すべるように下った町蔵と雁行者は、そうとは知らぬ八丁の浜太郎より十四、五間も先に立って待ちかまえた。

「行者。あいつに違えねえ」

「おれにまかせとけ、おれが聞いてみるから。聞いてるうちに、スパッと初太刀を入れろ、おれもすぐ突ッこむから、そうすりゃあ万に一ツはずれねえ」

「いいとも」

と相談している二人の眼のつけどころに気がついて、旅修業の積んだ浜太郎は、さてはと覚って片頬に出てくる笑みをそのまま、なにげない素振りで近く行った。

「もし、間違いましたらご免ください、浜太郎さんでございますか」

と行者が小腰をかがめてもみ手をするのを、笑ったような眼でながめた浜太郎は、軽くうなずいて意地悪く、行者の眼の玉をぐッとみつめた。

「おいら浜太郎ですが、なにかくれますかい」
「うむ。やる！」
　気の短い町蔵が、斜めうしろに廻りかけて廻りきれず、ただ一刀と斬りつけるを、体を引いてかわした浜太郎の素早さに、おもわくがはずれて刀の刃先が、避け損じた行者の眉の上をかすめた。
「あッ、間抜けッ」
　行者は疵をおさえて退きながら腹を立てた。
「てめえのおかげで行者が怪我した」
　と町蔵が火のような怒りを向けてきたのを、浜太郎はセセラ笑った。
「うぬが同士討ちをやりやがって、尻をおれに持ってくる奴があるか」
「なにをッ」
　我武者羅に斬ってかかる町蔵の利き腕を押さえ、機みをつけて腰車にかけ投げつけた。
「ぐう――」
　あとはなにもいわなくなった。
「おう、行者とかいうんだなおめえは。眉毛の上に手拭をかけろ、血が眼へ入るぜ、なんだ、もうへえっちゃっているのか。それじゃ手出しもできなかろうから、ゆッくりして帰って行け、妙太郎においらがよろしく言ったと伝言ろよ」
「待て」
「待たねえ、美い女でもあるなら待とうが、額が禿げあがっている大きな野郎ではな、眼の正月にもならねえよ」
「卑怯だぞ」
「なんていうとおめえ、おいらに斬られちゃうぜ」
　と、いい捨てに浜太郎は行ってしまった。
　そのあとで石州に舟松、つづいて妙太郎もようやく来た。飛び石だけはまだ途中で、馬に乗せてもらってヨチヨチ急いでいた。
「そうか――よしッ、おれも半塚の妙太郎だ、このままにしておいては顔がつぶれて渡世がならねえ。てめえたちもそうだろう、九蔵をやられた上に行者は怪我、町蔵は絶気ときては、どの面さげて沓田の衆に顔が合わせられるのだ」
　そういううちに町蔵が、石州の介抱で息を戻し、青い顔をしかめて加わった。
「野郎を追いこんで行って首にして」
　と妙太郎が切歯した。
　が、一刻経てば五里先だと、啖呵を切った浜太郎のゆくえは、いまからでは追いつけもしなかろう。

原ッぱ勝負

　稲妻の天の柱を真ッ黒な雲のなかに見た浜太郎は、さっきからの土砂降りで、頭からずぶ濡れ、息をつく隙もな

く、はためく雷鳴に弱っていた。
（どこを見ても人家はなし、あったところでわかりッこねえや。なんとまあまだ昼のうちだというのに暗いのだろう。いけねえまた稲光だ！）
自分の手足が青く染まって輝くほど、稲妻は豪雨まで光らせた。
（一体ぜんたい、ここはどこなんだ？）
道を誤って迷いこんだに違いがないと浜太郎は、たった一本あった立木の下で、自暴も手伝って、濡れ放題の雨叩きになった。
やがて、稲妻が間遠い光となり、雨も小降り、雷鳴も西に去って遠音になった。黒い雲が切れぎれに駛る上から、さらりと青空がのぞきはじめた。
（うッぷ！　なんてまあ酷い目にあうもんだろう。川の中へほうりこまれたようなものだ。おやおや、胴巻に水がたまってやがらあ）
どうで質屋が見つかるまでの辛抱だ、絞るにも及ばないと、旅渡りの身では時稀出会うことだけに、身ぶるいを二ツ三ツして浜太郎は、洪水のような原の細みちを、案外の気に歩き出した。
消魂しい人の叫びが横で起って、ぎょッとさせた。
浜太郎は楽旅仁義をこの半歳ばかり切ったことがない、どこでする仮寝にも長脇差は抱いて寝る身になりはなったが、いままで流させてきた血潮のぬしに、ただの一人も堅気がないのが、血みどろのいがみあいに終始してきたきょうまでで、ひとツの気安さだった。が、こんなところで不意の叫びは、さっきの続きがここではじまるものと、気のつき方も早いが、命を投げ出す態度のきまりも、迅速だった。
浜太郎は雨に洗われて鮮かに青い、丈なす草と灌木の茂みを見回し油断がなかった。
「だれだそこにいるのは。もしおいらに用があるのなら顔を見せてくれ！」
その声に狙いをつけ、投げ槍が一本蝮のように飛んできた。
「危ねえッ」
狙いがそれて九尺も向うで、鑢型の短柄の槍が、溜り水の底へさかさに突ッ立った。
「来たな野郎どもッ」
立木が二株近くにあった、浜太郎はそこへ駆けこみ、長脇差を抜いて身構えたが、濡れた袂がどうにも邪魔だった、といって、相手の知れないこの場合は、左封じの喧嘩状をつけられ、正面切っての勝負のように、支度も覚悟もするに隙がすこしもなかった。
「面をみせろ、どこのどいつだか名を名乗れ。勝ち負けは運次第、首になっても未練の眼を剝くおいらじゃねえが、何の何兵衛、何右衛門だか相手知れずはいやなこッた、名乗れ、面を出せッ」

さっきの稲光が染めつけたのか、浜太郎の声が青白く輝いた。
雲の流れは奔るがごとく、南の空では薄日の暮が宙になめに照っていた。
「極楽院のイカサマ賽の胴元だろう、出ろッ、面を出すにはちょうどいい、雨上りで日がカンカンとは照っていねえ、きまりを悪がらず出せ面を！」
目の前七、八尺の草むらがそよいでいて、潜伏している人の数を、ごくあらましに語っていたが、声に応じて、名乗って出るもの一人もなかった。
「それとも半塚の妙太郎か」
「なにをッ」
短気な町蔵が草むらを割って出た、顔中が光る眼と開いた口だけに化けた形相だ。
「てめえさっき浜街道の根戸とかいう田圃ぎわで、目を回した奴だったな」
「浜太郎、逃げるな」
と町蔵は七、八間の距離を保って、抜いて持った刀をふった。
「逃げるなじゃねえ、早桶の仕度はしてきたか」
「なにをッ」
「てめえがへえって帰る早桶だ。こっちへこい、一番はてめえにきめた、今度はあの世へ行きッきりだからそう思ってアンヨしてこっちへこい」
「なにをッ」
「いちいちなにをなにをといっていると日が暮れる、おいらは構わねえが、てめえたちは多勢だ、腹がへッてくると弁当の数がいるぞ」
「なにをッ」
「またなにをいってやがる、てめえのアンヨは釘付けか」
「歩けらあい、馬鹿にしやがって」
「ほかの奴らも歩けるか」
「あんなことをいやがる」
舌合戦では町蔵形なしにやられた。
と、見えたのが策戦で、囮につかった町蔵に浜太郎の注意をひきつけさせ、その隙にうしろへ深く回って背後に近づき、先手の一本、竹槍をふるう役は妙太郎自身が引受け、兄分の沓田への面目、子分九蔵への追善、同業の外聞に見栄を張る、三つを兼ねてあっぱれしとげる気で、息をつめて忍び寄った。
囮の町蔵は、ここをせんどと勇気を出して喋舌り出した。
「やい旅人、てめえこそ歩けめえ、そこにそうして二、三日いろ」
「てめえたちがつきあうなら二、三日といわず一月ばかりいてやらあ」
「ここをどこだと思やがる」
「知っているかてめえ」
「知らねえでよ、天下の御用牧場だ」

「ほい、小金ケ原か」
と、はじめて土地の名を知って、あらましの方角に見当がついた浜太郎のうしろでは、大事をとった妙太郎が、汗びッしょりの顔を光らせ、竹槍を構えて固唾をのんでうかがい寄った。
むン——下ッ腹に力を入れ、若いころの無法乱暴の経験を、ここ一番に賭けた妙太郎の竹槍が、浜太郎の濡れた背中を狙いの的にするりと行った。
「はいッ」
体を旋して浜太郎が、待っていたように出す手といっしょに、竹槍をつかんで引いて手放した。妙太郎の方でも竹槍を手放せば、手放しかげんの巧拙で、有利はたちまち浜太郎と入れかわるのだが、引かれた槍から手が放れず、妙太郎は前のめりに、一ッ二ッ泳いで背中がすこし丸くなった。
「あッ」
「危ねえ」
と町蔵もわれを忘れて手をあげたが、後見役についていた雁行者も飛び石も、肝を冷やして喚きたてた。
「来たかッ」
無免許の体験剣法、浜太郎は自得の手法で、一刀あびせ、木の下に仁王だち。
「だッ——だッ——だッ」
と、水溜りに顔半分おしつけ、手足を突ッぱる妙太郎に眼もくれず、雁行者、飛び石、町蔵と、いまの勝負に驚愕して、潜伏をやめて起った石州、舟松と五人の顔をズラリと見回し、
「お次の番だ。出ろッ」
と浜太郎が一喝した。
勝敗はそれでもう段落がついた、気の短いはずの町蔵も、腕力のすぐれている飛び石も、茫然として起ちつくすだけだった。
「やいよく憶えとけ、ことのはじまりは沓田の衆がイカサマで、お素人衆のふところを根こそぎフン奪ろうとしたのが癪で賭場を蹴ッくり返してやったからだ、と、知っているなあ。その次は、沓田へ義理か自分の見栄か、通りがかりのうしろから九蔵という男に、背中討ちをかけさせた妙太郎の卑怯が癇癪玉をぱちンといわせたんだ。見やがれ野郎ども、貫禄の重さ軽さは知らねえが人にたてられる坐り場所をもっている男が、案山子をつかって背中から不意を討とうとはこぎたねえぞ。おい、武州生れ八丁浜太郎、昨今駈出しの青二才だが、胸三寸に彫りつけて、忘れてならねえ文句がある、おいらは男だということよ。てめえたちは甘えものに寄りたかる蟻だから相手にしねえが、妙太郎に子でもあって、おいらに文句があったら捜してみろ、返討ちかも知れねえが相手にはなってやるからのう」
血を拭った刀に鍔音を高くさせ、胸をそらして行く浜太郎の鬢の濡れ毛が、べとりと頬に張りついているのが、い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.